

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】 川本佳苗

【所属】(助成決定時) 京都大学 東南アジア地域研究研究所 連携研究員

【研究題目】現代の自殺問題に対する仏教的アプローチの考察：ドキュメンタリー映画『ディパーチャー』を通して

【研究の目的】(400字程度)

本研究課題「現代の自殺問題に対する仏教的アプローチの考察：ドキュメンタリー映画『ディパーチャー』を通して」は、自殺防止活動に孤軍奮闘する禅僧の描写という一つの視点を分析することによって、心・死・人生の意味の探求といった普遍的テーマに対する、現代社会における宗教的ケアの意義を明らかにする。心生後、本映画には『いのちの心呼吸』という邦題が決定したが、本研究では『ディパーチャー』と記す。宗教的实践とは、宗教者から相談者へという一方通行では決していない。映画『ディパーチャー』では、現代日本において僧は、単なる宗教的指導者ではなく相談者と等しく苦悶する一人として、自殺問題に対し宗教的ケアを探求する姿が描かれる。これは今までの研究で看過されてきた視点である。本研究では、実践者をも含む全ての人に与える宗教的ケアを、そして実践者と相談者の相互関係から生まれる宗教的ケアの意味を明らかにする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究課題を実行するに当たり、研究内容を、参与観察とインタビューから成るフィールド調査と、映画『ディパーチャー』上映準備および上映で得たフィードバック、調査の記録資料作成の三つに分ける。研究時期は、第一段階(2018年10~11月映画内容の分析とフィールド調査)、第二段階(11月発表と発表後の記録資料作成)、第三段階(11~翌5月フィールド調査)の三つに区別される。

第一段階では、研究に先立つ準備作業と『ディパーチャー』のコンテキスト分析を目的として、映画の場面や台詞を分析しスクリプトを作成した。次にインタビュー調査に先立ち質問リストを作成した。その後、調査第一回目として、10月10日に岐阜県関市にある大禅寺の根本一徹住職によって行われるワークショップ「たびだち」に参加し、参与観察および根本氏と参加者へのインタビューを行った。10月18日には関西自殺自死に取り組む僧侶の会元理事の福井智行氏にインタビュー調査を、11月7日に根本氏へ二回目のインタビュー調査を行った。それらの観察ノートとインタビュー録音をテキスト化した。

第二段階として、11月16日から21日にかけて開催されたAAR(American Academy of Religion)で上映する映画『ディパーチャー』に関してコメンテーターを務めるため、コメント原稿を英語で作成した。11月19日の上映後の質疑応答では、現地の観客から得た質問を書き留め、今後の研究成果発表に用いる参考資料を作成した。

第三段階でのフィールド調査としては、12月6日、名古屋市内の真宗大谷派名古屋別院で行われた第十回自死者追悼法要「いのちの日のいのちの時間」に参加した。この法要は「いのちに向き合う宗教者の会」が主催しており、その代表を根本氏が務めている。法要後のわかち合いの会(座談会のようなもの)にも参加した。翌1月20日には根本氏のワークショップ「たびだち」に再度参加し、参与観察とインタビュー調査を続けた。その後、3月24~25日にまた根本氏が住職を務める大禅寺を訪問し、最後の参与観察と根本氏へのインタビュー調査を行った。5月3日には、東京へ出張した帰りに横須賀市独恩寺を訪問し、自殺自死に向き合う僧侶の会元代表の藤尾聡允住職にインタビュー調査を行った。5月までにこれらの録音内容をテキスト化し、資料を作成した。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究の主題は、宗教者による自殺防止実践の実態ではなくその実践が宗教者自身にも与える影響である。本研究から明らかになった点の一つ目は、自殺防止活動のケア対象者が自殺念慮者だけでなく、支援者である僧侶をも含むことである。映画『ディパーチャー』の根本氏も複数の近親者を自殺で失い、自殺防止実践を通じて生の価値を模索する一人である。自殺防止活動は、自殺を念慮する他者に生の価値を見つめる援助となるとともに、僧侶自身が救いを求める実践の一形態でもあること分かった。

二つ目は、宗教に対して親近感が少ない現代日本において、仏教僧がいかに宗教色を強調せずに自殺防止活動を行っているかという点である。根本氏以外にインタビュー対象者の僧侶である福井智行氏と藤尾聡允氏もまた、自殺相談のときに仏教的な思想や専門用語を用いずに、一般的な相談の場であるという雰囲気づくりに注意していた。このような姿勢は、申請者が出家し長期間暮らした、出家者と在家者が明確に区別される東南アジアの上座部仏教では決して見られないことである。

以上の2点から、現代日本における仏教僧の自殺防止活動の特色と実態を明らかにした。本研究は、今後も別の研究助成などを受けて継続する予定である。